

ネイチャー高知

No 53 2019年7月31日発行

日本自然保護協会会報『自然保護』フォトコンテスト実施中

日本自然保護協会では会報の表紙に掲載する写真を募集しています。募集期間は9月30日まで。皆さんも傑作写真で挑戦してみませんか。募集要項は次のとおりです。

■ テーマ

日本国内で撮影した野生動植物、自然を感じる風景や暮らし、文化。

■ 優秀作品

優秀賞（6点）入賞（5点）

■ 注意事項

未発表作品。（個人のブログ、ウェブサイトなどに掲載されたものは構いません）

合成、変形不可。

表紙に採用された場合は、表紙サイズ（B5判）に合わせトリミングして掲載させていただきます。軽度の露出や色調の補正をする場合があります。

動植物の個体を主題とする写真は、野生のものに限ります。（風景の一部や文化などを主題とする場合は除く）

餌付けや立ち入り禁止区域での撮影など、自然環境に悪影響を与える方法で撮影したものは不可。顔が分かる状態で人物が写っている場合は、応募にあたりその人物の許可をとってください。

応募作品は返却いたしません。

■ 結果発表

入賞作品は会報『自然保護』1・2月号（2020年1月1日発行）と当会のウェブサイトにて発表します。

■ 応募方法

解像度の高いデジタル写真データ（横2500×縦3600ピクセル以上）が望ましいですが、プリントした写真（2Lサイズ以上）でも可。

ウェブサイトの応募フォームか郵送でお送りください。

応募点数は5点まで。

それぞれ、①撮影年月日、②場所、③分かれば種名、④200字ほどで自然にまつわる撮影エピソード、⑤〒・住所、⑥撮影者名、⑦連絡先（電話、Eメール）、⑧日本自然保護協会の会員 or 非会員、⑨広報使用の可否（下記参照）をお知らせください。

写真を通して自然の魅力を伝えるボランティアにご協力ください。

入選・落選にかかわらず、応募作品を無償で日本自然保護協会の会報、ウェブサイト、Facebook、Instagram、パンフレット、講演資料などに使用してもよいという方は、ぜひ「広報使用可」と記載してお送りください。

撮影者の著作権は保持されます。

使用にあたりご連絡いたしません。撮影者名を明記します。

応募先

郵 送 :

〒104-0033 東京都中央区新川 1-16-10 ミトヨビル 2F

公益財団法人 日本自然保護協会会報表紙フォトコンテスト係

問い合わせ： TEL 03-3553-4106 E-mail shizenhogo@nacsj.or.jp

日本を支えたお蚕さんと桑畑のある風景

松本 孝（自然観察指導員）安芸市土居

ご存知のように越知町立横倉山自然の森博物館で企画展「越知のおかいこさま～昭和の越知を支えた養蚕業～」が7月20日（土）から9月8日（日）まで開催されます。

私は身近な自然と暮らしとのつながりに関心があり、お蚕さんと桑畑のことを、折りを見ては見聞きしていました。この国の経済を支えた産業が今では展示館で見て想像することに、世の移り変わりの速さに驚き、高知県内では昭和63年頃が養蚕をやめていった時代と聞きます。せんえつながら見聞きしたことを記しました。

■私の住む地域のお蚕さんと桑畑

私の住む土居廓中は安芸城跡があり、安芸城跡内の現在、安芸市立書道美術館や安芸市立歴史民俗資料館がある場所は戦前は桑畑で、他にも桑畑だった場所がありました。

私の親は子どもの頃、お蚕さんの手伝いに行ったと話していました。安芸市本町で養蚕のことを聞くと、同じ商店街に石油店があり、かつて製糸をしていたと聞きました。石油店の方に昔の話をうかがい、製糸場があった場所（現在の安芸市役所一帯）や年代（明治から大正）を知ることができ嬉しく思ったことでした。

地元の公民館でご年配の方々たずねると、養蚕の手伝いで持っていきよったと聞きました。

■高知県東部のお蚕さんと桑畑

奈半利町米ヶ岡地区の活動に参加させていただいたとき地形図を見ていて、米ヶ岡地区の隣の地区に桑畑の記号が多くあることに気づきました。

奈半利町に製糸場がありました。記念館へ行き話をうかがうとその地区は戦後、入植された方々がクワをして、製糸場へも持ってきていたとのこと。奈半利町の産業を支えたクワと知りました。

■学校のお蚕さんと桑畑

大学の先生にたずねると、前は小学3年生の教材（昆虫の育ち方）として蚕を使っていて、たいがいの小学校にクワは植えていて、休み時間に子どもが取りにいていたとうかがいました。

生活科で児童が蚕を飼育することに取り組んでいた小学校があると聞いています。

■西日本唯一のお蚕さん

愛媛県に明治17年創業の西日本で唯一、蚕の卵（蚕種）の製造販売、蚕の幼虫の販売をしている会社があります。松山市へ所用でいった時に、この会社がある保内町（現在、八幡

浜市保内町）へ行っていました。

保内町は海運や鉱山、木蠟、養蚕、金融、紡績などで栄えたと資料にあります。愛媛蚕種（株）は明治17年創業で西日本では唯一現役の蚕種会社として営業。生き物を扱うので建物内は立入禁止（ごもつとも）でして、敷地沿いの道を



愛媛蚕種（株）（旧日進館） 桑畑と建物 （平成27年8月10日撮影）

巡り、桑畑があるのが個人的に嬉しくしばらく眺めていました。絹の特性を生かした研究開発（医薬品や化粧品）へも参加されているようです。地元中学生が学習し作成した資料の提示も拝見しました。

■ 100年前のこの国の方たち

神奈川県横浜市にある「三溪園」。そこは製糸や生糸貿易で財をなした原善三郎、原富太郎（雅号 三溪）により築園され、原善三郎が造園を好んで別荘を建て、善三郎が亡くなった後は三溪が庭園造成し、明治39年に三溪園として一般に公開されました。

三溪は私有するのは良とせず、公開するはむしろ当然…の考えを持たれた方で、花見の季節に多くの来園者が楽しむ姿を、三溪は嬉しそうに書斎から眺めたとあります。

今では園内に重要文化財、市指定有形文化財となっている建造物があり、三溪の自然への思いと人に向ける思いが、文化の継承を思う後世の者にとって有り難い良いお金の使い方をされたことに敬意を表しながら園内を巡ったことでした。



三溪園 （平成27年9月12日午前撮影）

■ ウチの畑のクワ

私の住む土居廓中の町の形は、江戸時代の廓中の絵図を見ると、ほぼ変わらない「区割り」が今も残っていることがわかります。区割りに沿って生け垣や塀があり、区割りの敷地内には屋敷や畑があり、区割りは「武家町土居廓中」の基本をなす大切なものといえます。

数年前、ウチの隣の蚕室だった建物跡の一部がウチの区画になり、私は土居廓中のたたくまいにそうよう、道沿いは竹の生け垣にし、区画内は畑にしています。

畑で耕しているとやや大きめの石が出てきました。蚕室だった建物内には3ヶ所の囲炉裏があって、2ヶ所は冬場に建物内を暖かくするため、1ヶ所は葉の乾燥ではと家の者より聞いていました。その石が出てきた場所は冬場に建物内を暖かくする2ヶ所と聞いた内の1ヶ所とほぼ同じ場所。この石は囲炉裏の基礎部の角に組まれたものではないかと推測したことでした。

出てきた石を使って囲炉裏をイメージして四角く囲うように出てきた場所に配置し、その囲った中にクワを植え、この地にお蚕さんとともに暮らしがあったことを受け継ぐ思いです。

私自身、野外活動の際、クワの果実を味わうのは楽しみと気軽に思う方なのですが、養蚕の方々は枝葉を取るのも果実にならなかったかもと推測します。県外のお住まいの方より、今ではクワがそのままとなっているところがあり、果実にサルが来ていると聞いたことがあります。

企画展、見にいきます。

県民の森・工石山周辺に咲くスマレ ①

細川 公子

高知市北部に位置する工石山とその周辺は、身近に多種類のスマレが観察できるフィールドです。高知県には約30種のスマレが自生していますが、ここのエリアでは確実に15種、丹念に探せば20種位、高知県の約1/3が出現すると思います。また、種類の多さと共に、工石山周辺では特に花の色の変異が多いのが魅力です。今号では県道16号線と林道沿いで観察できるスマレについてご紹介します。

3月下旬、土佐山・高川あたりではタチツボスマレやコスミレが県道沿いを彩り、高度が上がった青少年の家近くではアオイスミレが咲き始めます。4月中旬になると県道～林道沿いの法面などはスマレの花盛りとなり、エイザンスミレは白（シロバナエゾスマレ）から濃いピンクの花まで変異に富んだ花が観られます。さらに、淡いピンクの可愛いマルバスミレの群生を林道の壁に見つけると「おー！」嬉しくなります。ただ、マルバスミレは大群落を形成した翌年ぐらいに突然姿を消すことが多いため、来年以降毎年観られる保証はありません。あと、タチツボスマレの標準的な色は淡青紫色ですがここでは、淡い淡紅色で花弁も丸みがある花が観察できます。その他では、スマレ、ノジスマレ、ヒメスマレ、アカネスマレ、アリアケスマレ、ナガバノスマレサイシン、ナガバノタチツボスマレ、ニオイタチツボスマレ、ニョイスミレなどを探してみてください。（次号では樹林下の登山道で観られるスマレを紹介します）。



【写真の説明】

上段 左：アオイスミレ 右：シハイスミレ

中段 エイザンスミレ (左はシロバナエゾスミレに近いタイプ)

下段 左：マルバスミレ 右：群生する淡いピンクのマルバスミレ

化石生物が生きていた—最近の2例

三本 健二

本年6月、化石でしか知られていなかった甲殻類が土佐市の干潟に生きていたとの報道があった。一昨年(2018年)の1月には、化石陸産貝類が日高村に生息していたとの報道があった。これら2例について紹介する。

オオスナモグリ(甲殻類)

オオスナモグリは、渥美半島の約44万年前の地層から採集された化石に基づいて1996年に新種記載されていた。

生きた個体は見つかっていなかったが、本年6月、生きた個体を発見したとの論文が学術誌に掲載され、そのことが6月5日から翌日にかけて報道された。高知新聞では6日の朝刊に掲載されている。

生きた個体は、土佐市の浦ノ内湾で1個体が、静岡県沼津市の河口で3個体が採集され、論文ではこれらの標本に基づいて新属が提唱された。

化石は、特徴的な「ハサミ」が関東から沖縄までの広い範囲で見ついている。中四国での産出記録はないが、筆者は1981年に土佐清水市市街地の約14万年前の足摺層から採集していた。そのうち3点を高知みらい科学館で9月23日まで開催中の企画展「高知の海をカガクする」の中で、浦ノ内湾で発見された生きた個体のパネルなどとともに展示していただいている。

なお、インターネットで「オオスナモグリ」を検索すると、生きた個体の全体画像や、巣穴の中に全身が保存された化石を報告した論文などが見られる。



土佐清水市幸町の足摺層産オオスナモグリ化石。左大鉗脚の不動指。基部に明らかな湾入(矢印の先)があるためオスのものと分かる。

【文献】

Karasawa, H. & Goda, T. 1996. Two species of decapod crustaceans from the Middle Pleistocene Atsumi Group, Japan. Scientific Report of the Toyohashi Museum of Natural History, (6): 1-4.

Komai, T., Yokooka, H., Henmi, Y. & Itani, G. 2019. A new genus for “*Neocallichirus*” *grandis* Karasawa & Goda, 1996, a ghost shrimp species (Decapoda: Axiidea: Callianassidae) heretofore known only by fossil materials. Zootaxa, 4604(3): 461-481.

サルダアツブタムシオイ(陸産貝類)

サルダアツブタムシオイは、殻径(または殻幅)が4mmほどの小さい巻貝である。日高村にある猿田洞内の約3万年前の裂罅堆積物から採集された化石に対して2012年の論文で和名だけが付けられていた。

その後、生きた個体が同村内で発見され、2016年11月に学術誌に新種記載(学名命名)の論文が発表された。そのことが翌年1月20日の高知新聞朝刊で報じられた。

この貝の画像や解説は、高知県ホームページ内の「高知県レッドデータブック 2018 動物編」に掲載されている。また、下記の新種記載論文は、PDF が公開されている。

なお、ムシオイは「虫負い」で、殻の上面に虫様管があることから名付けられている。アツブタは「厚蓋」で、殻口にある蓋が他のムシオイ類よりも厚いことを表している。

【文献】

Yano, S., H. Matsuda, K. Nishi, M. Kawase and Y. Hayase. 2016. Two new species of *Awalycaeus* (Caenogastropoda: Cyclophoridae: Alycaeinae) from Kochi and Kumamoto Prefectures, Japan. *Venus* (Journal of the Malacological Society of Japan), 74(3-4): 51-59.

夏休み中の企画展のお知らせ

横倉山自然の森博物館

夏休み企画展『越知のおかいこさま～昭和の越知を支えた養蚕業～』

期間：7月20日(土)～9月8日(日) 時間：午前9時～午後5時(最終入館は午後4時30分)

会場：越知町立横倉山自然の森博物館 1階ホール

※休館日：毎週月曜日 8月12日は開館 ※お盆期間は無休

高知みらい科学館

企画展「高知の海をカガクする」

期間：7月13日(土曜日)～9月23日(月曜日・祝日)

会場：展示室

※月曜日は休館日(祝日を除く)です。ご注意ください。

高知県立のいち動物公園

夏休み企画展 小さな世界のキレイ×オモシロイ×コワイ

期間 7月20日(土)～9月1日(日)

会場 高知県立のいち動物公園 どうぶつ科学館

高知県立牧野植物園

展示館リニューアルオープン

新たに生まれ変わった館内には「展示館シアター」を新設。ここでしかみることができない、高画質なオリジナル作品を上映します。

牧野富太郎の植物図など、貴重な資料を展示する「牧野蔵」と、常設展示「植物の世界」も一新し、8月3日にリニューアルオープンします。

8月3日(土)9:15～ 記念式典開催 シアターの一般公開は11時からになります。

わたしのフィールドノート 雑草 旬を食べる

田城 光子

雑草とは何だろう。広辞苑によると、雑草とは自然に生えるいろいろな草。農耕地で目的の栽培植物以外に生える草、とある。ちなみに「雑」とは有用でないもの、分類しにくいものと書かれている。雑草の定義はいろいろのようだが、いずれも人間にとって利用価値がない、あるいは農作物に害を及ぼす植物をさすようである。そして、きちんとした名前と呼ばれることはあまりない。

本格的に農業を営むほどの広さはないが、自家菜園には広すぎてわたしの手にはおえない。それでも先祖代々受け継がれてきた土地を、自分たちの代で荒らすわけにはいかない。その上「里山の保全」などと偉そうなことを言ったりするものだから、気合を入れて季節の野菜を作ってみる。しかし収穫にこぎつけるまでの苦労は並大抵ではない。いわゆる雑草とのたたかいが続く。たいていの野菜は草に埋もれてしまい、中には収穫せずに終わってしまうものもある。近ごろは、あちこちで採集し観察したあとの植物を畑に捨てたりするものだから、見慣れない外来種も増えるようになった。春にはオオイヌノフグリやフラサバソウ、イボミキンポウゲが生え、少し遅れてコセンダングサが大群生するようになる。ほっておくと秋には木のようになり、果実が衣服にささろうものなら取れなくなって往生する。こうなると、ますます畑の手入れが苦痛になる。一時期、まったくお手上げ状態でジャングルと化したこともあった。その頃、私が足を骨折して歩けなくなり、夫が朝食の準備をしてくれたことがあった。味噌汁の中に、不思議な食感の葉っぱが入っていた。

少しざらつき、ぬめりもある。問えばマルバツユクサとのこと。それから時々マルバツユクサは、卵とじや天ぷらとなって食卓にならぶようになった。夏の日差しが強くなる頃、スベリヒユがたくさん生えた。みずみずしい茎が美味しそうに思え、さっと湯がいて水にさらし、わさびとマヨネーズで和えてみた。少し酸味があって爽やかな味だ。調べてみると、とても栄養価の高い食材であることがわかった。春にはカラスノエンドウやナズナ、ツクシ、ハコベ、ノビルなどが次々に生えてくる。いつの頃からか、栽培の野菜だけでなく、これらを食材として利用するようになった。

雑草を美味しく食べるコツは、旬をみきわめること。雑草の旬は短い。そのため、たびたび生育状態を見に行く必要がある。それは、雑草を退治することとは違う、とても楽しいことである。コセンダングサは食用にはならず、悩みのたねであったが、草木染の染料としてアメリカセンダングサと一緒に使うことを思いついた。染めてみると、落ち着いた良い色が出た。これまで利用価値がなく害草とばかり思っていた植物が、少しずつわたしの暮らしを豊かなものにしてくれる、有用なものに変わっていった。昭和天皇は「雑草という草はない。どんな植物にも名前があり、それぞれ自分の好きな場所で生を営んでいる」と言われ、お住まいの庭に生える草を除去しなかったそうだ。それぞれの植物を、雑草にするかどうかは、自分たちの植物に対する向き合い方にある。(写真 上：マルバツユクサ 下：スベリヒユ)



野山での拾い物　クマゼミ

坂本 彰

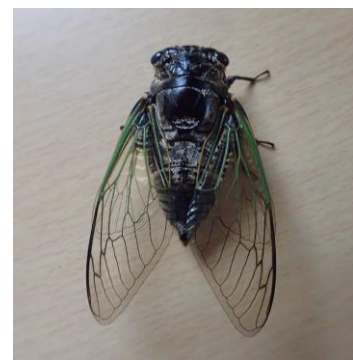
今年のクマゼミの初鳴きは例年よりだいぶ遅い感じがしていた。「手帳に記録をしておかなければ・・・」と思いつつ、書き込みを忘れ数日もたつと何日だったか思い出せない。昔はいろいろな出来事をきちんと手帳に記録していたのに、退職後 10 年にもなるとだんだん書き込むことが少なくなり、それに伴って、記録しておかなければならないことも記録しなくなるという状態に陥っている。

もう一昔前になってしまったが、季節ごとに気になる動植物のことを記録していたころのクマゼミの初鳴き日を拾ってみると、2009 年 7 月 3 日、2010 年 7 月 11 日、2013 年 7 月 8 日、2014 年 7 月 10 日が記録されている。ただ、どこで聞いたのかの記入がないので、多分自宅で聞いたのだらうとは思いますが、どこかへ出かけていた際に聞いたのも混じっているかもしれない。このような記録は定点で観測するのが基本で、最低限、何時ころ、どこで聞いたかは、記録しておくべきだった。

あやふやな個人の記録でなしに、ちゃんとした記録を見てみた。高知地方気象台の「生物季節観測」の記録である。WEB で公開されている記録を見ると、高知地方気象台では 1981 年から継続して観測されており（1958 年から 1960 年までの記録もあるが、3 年間のみで中断されている）、それによると最も早かったのは 2005 年の 6 月 28 日で、遅かったのは 1981 年と 1986 年の 7 月 16 日であった。今年はというと初鳴き日は、7 月 5 日で、昨年より遅いものの、平年比では 1 日早いということだったらしい。平年は 7 月 4 日なので、「今年は遅い・・・」と感じたのは私の記憶違いであったのだろうか。

今年の四国地方の梅雨明けは「24 日ごろ」で、昨年より 15 日、平年より 6 日遅かった。先陣争いをするクマゼミが地中から這い出して来るのは、ちょうど梅雨末期のころで、早くに出てきた個体は、悪天候に遭遇する。今年は、羽化途中で失敗した幼虫を例年になく多く見た。ファールブルによると、セミの坑道は地上に出てくるまで待機している部屋兼測候所であり、幼虫は外気の状態を調べ、安全に羽化できることを予測したうえで、地上に這い出して来るそうだ。それでも今年のような気候の年には、失敗する個体が出るのだらう。

写真のクマゼミは弱って庭に転がっていた個体である。羽もほとんど傷んでいなかったが、弱り切っていて自力で飛ぶことはなかった。梅雨明け前のお天気の中で、無事に羽化したものの、鳴く機会は少なく、配偶者にも恵まれなかったのではないかと、勝手な推測をした。



観察会のお知らせ

初秋の草原の植物観察会

【日時】 2019年8月31日（土曜日）午前9時から12時（予定）

【場所】 高知市高見町皿ヶ峰（9時に筆山第3駐車 皿ヶ峰登山口集合）

【講師】 稲垣典年（当会会長・牧野植物園職員）

【参加費】 無料

【持ってくるもの】 筆記用具 あれば図鑑

【その他】 雨天中止です。参加希望者は事前の申し込みをお願いします。

事務局からのお願い・お知らせ

会費納入のお願い

2019年度の会費の納入をお願いします。金額は年額（1月から12月までです）1,000円です。

今回個人別に未納状況をお知らせしています。過去の未納分も含めて納入ください。

納入方法は郵便振替が安価で便利ですので、郵便局備え付けの振替用紙を利用して、振込みをお願いします。（ゆうちょ銀行に口座をお持ちの方は口座振替も利用できます）

郵便振替の振込口座番号は 01630-9-41422

加入者名は 高知県自然観察指導員連絡会 です

「ネイチャー高知」の原稿募集

「ネイチャー高知」は、高知県自然観察指導員連絡会の機関紙として、1月、7月の年2回発行しています。身近な観察記録など、どしどし投稿ください。

投稿に関するお問い合わせは下記事務局までお願いします。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報 No. 53

事務局 780-8075

高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail s-akira@mvd.biglobe.ne.jp